

近代漢語副用語の出現形態と使用場面との関連性

趙 英 姫

【キーワード】 漢語 副用語 近代語 形態 使用場面

1. 研究の目的

本来外国語である漢語は、体言として日本語のなかに受け入れられるのが普通であるが、なかにはほかの品詞性を有するものがある。山田孝雄(1940)は、漢語のなかでも日本語の語法にしたがって用言、副詞になるものは体言になるものより一層日本語として熟したものとしている。

漢語語基が文の構成要素として副詞としてはたらくとき、日本語に溶け込む程度によっていくつかの段階が存在すると考えられる。書き言葉の場合、もっぱら会話文に使われるものと、会話文と地の文両方に使われるもの、地の文にしか使われないものがある。それぞれは、漢語の日本語として溶け込んだ程度を反映すると考えられる。趙英姫(2001)では、近代語形成期における漢語副用語の出現形態と使用場面との関連性について大体の傾向を報告した(以下では「前稿」と呼ぶ)。本稿の目的は、近代語形成期とその完成期との比較を通じて、近代漢語副用語の出現形態と使用場面との関連性を明らかにするとともに、近代漢語副用語の特徴を抽出するところにある。

2. 研究方法

考察の対象となる漢語副用語とは前稿と同様、語基の部分に一単位以上の字音形態素を含み、単独または和語の助辞が結合した形で文のなかで連用修飾的成分になるものを指す。また、一般には形容動詞の連用形とされるものや時間副詞、数量副詞も考察の対象に入れた。狭義の借用語に限らず、いわゆる和製漢語も含まれる。なお、前稿では漢語副詞という用語を使っているが、分析の対象には狭い意味の副詞より広い範囲の、述部を修飾する諸成分が含まれるので、漢語副用語にあらためた。前稿では言文一致期以降明治末期までの小説を調査対象としたが、今回は1960年前後の小説のほかに、シナリオ、新聞、随筆などの異なるジャンルも対象とし、ジャンル別の比較もこころみた。また、今回は和語副詞も対象とし、漢語副用語と大体の傾向を比較した。

とくに1960年代を近代語の完成期とみたのは、この時期が経済の高度成長、大

衆消費社会の到来、日本型市民社会が成立した時期で現代史において現在の日本社会の基盤が確立した時期だとされているからである。その意味で、1960年代を現代史の一つの分岐点として考え、近代語の出発点である明治期の言文一致体の日本語と比較することは意味のあることだと考えられる。

資料とした作品の詳細は論文の末尾に示す。小説の場合作者の出身地、作品の舞台などを考慮して作品を選んだ結果、1950年代の作品が中心となったが結果に大きな影響を及ぼすことはないと考える。随筆の全集類はそこに収録された作品のなかから1960年代の作品だけを選んでいいる。また、多種の作品を対象とするために、作品の全分量を扱ったのではなく、その一部だけを対象としたものもある。

3. ジャンル別漢語副用語と和語副詞の比較

表1は漢語副用語をジャンル別に集計したものである。漢語語基の数とは「一向」と「一向に」、「自然」「自然と」「自然に」のように二つ以上の語に派生する漢語語基をそれぞれ一つに数えたときの数である。

表1 ジャンル別漢語副用語の集計

	シナリオ	小説	随筆	新聞
異なり語数	520	563	590	644
延べ語数	4028	4225	4234	4225
漢語語基の数	474	513	522	614

集計の結果、ジャンル別の特徴として同じ書き言葉でも、話し言葉を反映したシナリオの異なり語数をもっとも少なく、書き言葉の性格のもっとも濃い新聞に漢語副用語が多用される傾向が顕著である。新聞に使われる漢語副用語には、以下のような接辞性の字音形態素「的」を含む三字以上のものが多いことが特徴的である。

一方的に 経済的に 国際的に 実質的に 積極的に 徹底的に 比較的

シナリオ、小説、随筆の「的」を含む三字以上の漢語副用語の異なり語数が大体60前後であるのに対し、新聞の「的」を含むものの異なり語数はその二倍以上の167である。「不フ」「無ム」のようなほかの接辞性の字音形態素を含む用例の数は、たとえば「無ム」は新聞では11、随筆では7、シナリオでは11、小説では13と一定している。それと比べて、「的」を含む三字以上の漢語副用語だけが新聞においてほかのジャンルより2倍以上も多くみられるのは、客観的な事実関係を論理的に表現する固い書き言葉の文章に「的」を含む漢語副用語が適していることをあらわす。

- [1] このように、孤立したままのアジア諸国が経済的に協力し合う道をさがし求めることは、むろん容易なことではない。(朝日新聞社説, 1962.3.6)
- [2] 同じ電鉄会社がなぜこんなにつづけて大きな事故を起すのか、根本にあるものを徹底的に究明しなければならぬ。(朝日新聞天声人語, 1968.11.9)

次に、ジャンル別に和語副詞を比較してみる。和語副詞の認定は『三省堂国語辞典 第五版』および竹内美智子他（1973）の「現行辞書における副詞一覧」にしたがった。形容動詞の連用形と時間副詞、数量副詞は除かれるので、漢語副用語より認定の範囲が狭い。また、和語副詞は異なり語数だけを調査した。

表2 ジャンル別和語副詞の集計

ジャンル	シナリオ	小説	随筆	新聞
異なり語数	464	409	232	178

和語副詞の異なりの出現語数は、表1とちょうど反対の順を示している。和語副詞はシナリオにもっとも多く、新聞にもっとも少ない。とくに随筆と新聞の和語副詞の異なり語数はシナリオと小説のほぼ半分程度であるが、その理由はシナリオと小説の文章に頻繁に使われる擬声語と擬態語が随筆、新聞の文章では極端に少ないからである。

ジャンル別に漢語副用語と和語副詞を比較した結果、新聞、随筆、小説、シナリオの順に、固い書き言葉の文章であればあるほど漢語副用語が多く使われ、和語副詞の場合は反対に話し言葉を反映したやわらかい書き言葉に多く使われることが明らかになった。

次に、シナリオと小説のデータから、漢語副用語と和語副詞を使用場面によって分類したときに差があるかどうかをみることにする。以下、表の括弧のなかの数字は百分比をあらわす。

表3 小説データの使用場面による分類の比較（異なり）

使用場面	漢語副用語	和語副詞
会話文にしか出現しないもの	43(7.7)	33(8.1)
地の文にしか出現しないもの	352(62.5)	260(63.5)
両方に出現するもの	168(29.8)	116(28.4)
計	563(100.0)	409(100.0)

表4 シナリオデータの使用場面による分類の比較（異なり）

使用場面	漢語副用語	和語副詞
会話文にしか出現しないもの	149(28.7)	130(28.0)
地の文にしか出現しないもの	238(45.7)	258(55.6)
両方に出現するもの	133(25.6)	76(16.4)
計	520(100.0)	464(100.0)

小説データとシナリオデータともに漢語副用語と和語副詞の使用場面別の割合は若干の違いはあるがほぼ一定しているように見える。しかし、和語副詞の地の文にしか出現しないものには、擬態語と擬声語が多く含まれている。以下は、地の文にあらわれる和語副詞の擬態語と擬声語の例である。

【小説】

いそいそと けらけらと じろじろ すらすらと ぬるぬると めらめらと

【シナリオ】

おろおろと きらきらと くすくす ぞろぞろ のろのろと ばたんと

[3] 恐ろしい、入りである。ムンムンと、盛夏のような熱気が、立ちこめている。(獅子文六『自由学校』)

[4] テーブルの上に置かれた七輪で、すき焼がぐつぐつ煮えている。(「傷だらけの山河」、『年鑑代表シナリオ集 1964』)

漢語副用語と和語副詞を使用場面で比較すると、擬態語と擬声語を和語副詞に含めた場合両者に大差はないように見える。しかし、擬態語と擬声語は地の文にかたよって出現する傾向がみられるので、擬態語と擬声語を除いて考えるならば和語副詞の地の文にしか出現しないものの割合が漢語副用語より低くなることが予想される。

4. 近代漢語副用語の出現形態と使用場面との関連性

4. 1 形成期と完成期の出現形態と使用場面による分類の比較

前稿で示した近代語形成期の集計結果には、地の文が文語文で書かれた『金色夜叉』の用例が含まれていたため、それを除き、修正しなおした。その結果、延べ語数 4079、異なり語数 580 が得られた。以下は、形成期と完成期の漢語副用語を出現形態別に分類し、比較したものである。φ は助辞が見つからないことを意味する。

表 5 出現形態による漢語副用語の分類 (形成期)

付加助辞	ニ	φ	トシテ	ト	シテ	ハ	モ	その他	計
異なり語数	234	221	47	61	5	1	2	9	580
延べ語数	1421	2150	79	134	158	91	14	32	4079

表 6 出現形態による漢語副用語の分類 (完成期)

付加助辞	ニ	φ	トシテ	ト	シテ	ハ	モ	その他	計
異なり語数	302	191	22	37	4	1	2	4	563
延べ語数	1855	2017	34	103	153	41	2	20	4225

「一向」「一向に」のような、同一の漢語語基によるものを一つに数えると、漢語副用語として派生する漢語語基の数は形成期が 516、完成期が 513 でほとんど変わらない。シテ型は「決して」の延べ語数が多いため、異なり語数は少なくとも延べ語数も多い結果となった。形成期と完成期の比較では、トシテ型とト型の異なり語数が半分ちかく減少し、とくにトシテ型は延べ語数も半分ちかく減っていることに注目したい。このことから、形成期にみられた文語文の色合いが、だんだん薄くなっていることがうかがえる。以下は、形成期にはあったが完成期には使われなくなるトシテ型、ト型の例である。

駭然として 傲然と 秩然と 木然として 涌然と 凜然として 玲瓏と
そのほかニ型の異なり語数と延べ語数がともに増えている半面、φ型の異なり

語数と延べ語数がともにやや減少している。

次の表は形成期と完成期を使用場面によって分類したものである。

表7 使用場面による漢語副用語の分類（形成期）

使用場面	異なり語数	延べ語数
会話文にしか出現しないもの	69(11.9)	105(2.6)
地の文にしか出現しないもの	328(56.5)	600(14.7)
両方に出現するもの	183(31.6)	3374(82.7)
計	580(100.0)	4079(100.0)

表8 使用場面による漢語副用語の分類（完成期）

使用場面	異なり語数	延べ語数
会話文にしか出現しないもの	43(7.7)	48(1.1)
地の文にしか出現しないもの	352(62.5)	843(20.0)
両方に出現するもの	168(29.8)	3334(78.9)
計	563(100.0)	4225(100.0)

用例を含む地の文と会話文の量は、形成期が2:1、完成期が3:1であった。形成期より完成期の会話文にしか出現しないものと両方に出現するものの割合がやや低く、地の文にしか出現しないものの割合がやや高いのは地の文と会話文の調査量の差の影響もあったと考えられる。しかし、漢語副用語の異なり語数を使用場面によって分類したとき両時期において大きな変化はないとみてよい。

両時期ともに異なり語数では地の文にしか出現しないものの割合がもっとも高いが、延べ語数では両方に出現するものの割合がもっとも高く、両方に出現する漢語副用語ほど使用頻度が高いことがわかる。完成期の場合、会話文にしか出現しないものは「積極的に」「具体的に（は）」「普通に」「良心的に」以外は延べ語数が1であり、地の文にしか出現しないものは352のうち201は延べ語数が1のものである。このように、会話文にしか出現しないものと地の文にしか出現しないものには一回かぎりのものが多く、表の数値は4225の延べ語数を調査したときの大体の傾向を示すものとして考えるのが妥当であろう。次に、完成期の漢語副用語の具体例を使用場面別に示しておく。数字は延べ語数をあらわす。

【会話文にしか出現しないもの】

積極的に3 具体的に（は）2 普通に2 良心的に2 一体全体1 気分的に1

形成期に比べて完成期には接辞性の字音形態素「的」「後ゴ」「上ジョウ」「中ジュー」「中チュウ」「不フ」「無ム」などを含む三字以上の漢語副用語が増え、会話文にも普通に使われるようになったことが特徴的である。

[5]「もう此の頃じゃ、父は母より私の方が怖いんだから。けどどね、作戦上、中野さん達のことをはじめに知ったのは、私じゃなくて、岡田先生ということにしておいてね」（三浦朱門『セルロイドの塔』）

[6]「私はいま常盤さんにお話していたんですが、実験はあくまで良心的にやり

たいと思います。いささかの私心もはいつてはいけない。(下略)」(井上靖『水壁』)

【地の文にしか出現しないもの】

不意に 25 当時 (は) 23 一斉に 18 現在 (は) 16 最初 (は) 13

以下は、地の文にしか出現しないものの例である。

[7] ……節子はふいにうしろに菊夫の影を感じた。節子はふりむいた。そのとき、日灼けのあとも残して、ここ半年のあいだに、見ちがえるほど大きくなった子供を発見した。(三島由紀夫『美徳のよるめき』)

[8] B29の轟音は耳を聳するほど低空した。彼女は子供を背負ってじゃぶじゃぶと水を掻きのけながら懸命に逃げた。(芝木好子『洲崎パラダイス』)

【両方に出現するもの】

一緒に 180 急に (は) 177 本当に (は) 162 決して 132 今度 (は) 104

以下は、両方に出現するものの例である。

[9] 柴田の趣味は旅行である。めったに社を休むことはないが、休むときはかためて休む。そして突然会社あてに北海道や伊豆や瀬戸内海の島や箱根から変名で手紙をくれた。(山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』)

[10] 夜の着物を借りに登代は女主人の部屋へ出向いた。来る日も来る日も借事で、結局は借金してそれを買うことになるのだけれど、彼女の稼ぎではいつまでしても着物一枚自分のものにはならないのだ。(芝木好子『洲崎パラダイス』)

4. 2 共通して出現する漢語副用語の使用場面と出現形態との関連性

形成期と完成期両方に共通する漢語副用語は、異なり語数の約半分程度の253であるが、延べ語数では形成期が3462、完成期が3382で各延べ語数の約8割程度をカバーするほど使用頻度の高いものである。共通する漢語副用語のうち、主なものの例をあげておく。

一体 一緒に 急に (は) 結局 決して 随分 大変 本当に 勿論

次の表9は253の漢語副用語を主な出現形態別に分類したものである。括弧のなかは形成期と完成期の出現形態別総数(異なり語数)に対する百分比である。

表9 共通漢語副用語の出現形態別分類の比較

出現形態	ニ型	φ型	トシテ型	ト型
形成期	110/234(47.0)	106/221(48.0)	8/47(17.0)	18/61(29.5)
完成期	110/302(36.4)	106/191(55.5)	8/22(36.4)	18/37(48.6)

この表からわかることは、φ型、トシテ型、ト型ともに共通漢語副用語の出現形態別総数(異なり語数)に対する割合が形成期より完成期に高くなっている反面、ニ型だけが低くなっていることである。これはいいかえれば、完成期に入って新しく出現した漢語副用語にはニ型がもっとも多いということであり、漢語語

基が新しく副用語として派生するときにニ型をとりやすいということである。

次の表 10 は完成期のニ型を共通するものと共通しないものによって使用場面によって分類したものである。

表10 使用場面による完成期のニ型の分類（異なり）

	共通するニ型	共通しないニ型
使用 場面 に よ る 分 類	会話文にしか出現しないもの 4(3.6)	会話文にしか出現しないもの 20(10.4)
	地の文にしか出現しないもの 61(55.5)	地の文にしか出現しないもの 147(76.6)
	両方に出現するもの 45(40.9)	両方に出現するもの 25(13.0)
	計 110(100.0)	192(100.0)

共通しないニ型は、形成期と共通するものに比較すると、地の文にしか出現しないものの割合が高く、両方に出現するものの割合が低い。このような傾向がみられるのは完成期に入って新しく増えたニ型は当然日本語としての溶け込み度が低く、それだけ会話文には出現しにくく、地の文にしか出現しないものが多いからである。前稿では会話文に出現し日本語としての溶け込み度が高いほどφ型をとる傾向がみられると指摘したが、それに加えて漢語語基が新しく副用語として派生するときはニ型をとりやすく、その場合溶け込み度が低いだけに地の文にかたよって出現するということが指摘できる。実際、以下の形成期の同一の漢語語基によるニ型とφ型の漢語副用語の場合、完成期になると下線を引いたφ型だけが残るものが多い。これは漢語副用語の場合、副用語として熟し、安定するほどφ型をとりやすいことを裏付ける。

一体に 一体 早速に 早速 精一杯に 精一杯 沢山に 沢山 突然に 突然

以下の例は完成期に新しく増えたニ型で副用語としての用法があまり熟していないとみられるものの例である。

[11] 節子の話はまるで嘘のようだった。彼女は学長の秘書だから、学校のこと
に敏感になりすぎているのだろう。大きな川のずっと山奥で降った局地的
な豪雨も、川下にくるまでに、適度に消化されて、河口では、流れるとも
見えない水が淀んでいるようなものだろう、と岡田は思った。(三浦朱門
『セルロイドの塔』)

[12] 学生の九割までは世間のことに対しても、学校内の事件にも、完全なる野
次馬である。彼等は退屈ききって学校へ来る。小遣いがもう少しあれば、
一日を有効に使うプランがあれば、学校へは来ない。(三浦朱門『セルロイ
ドの塔』)

4. 3 共通して出現する漢語副用語の使用場面の変化と出現形態との関連性

形成期と完成期に共通して出現する漢語副用語の使用場面の変化は、その漢語副用語の溶け込み度と関係すると考えられる。たとえば、形成期には地の文にしか出現しないものであった漢語副用語が完成期においては両方に出現するもの、または会話文にしか出現しないものに変化したとすれば、それはその漢語副用語がより日本語として熟してきたとみていいだろう。そして、溶け込み度が高くなる場合は使用頻度が高くなり延べ語数も多くなることが予想される。表 11 は共通する 253 の漢語副用語の形成期と完成期の使用場面の变化をまとめたものである。【会】は会話文にしか出現しないもの、【地】は地の文にしか出現しないもの、【両方】は両方に出現するものを意味する。

表11 共通漢語副用語の使用場面の变化

使用場面の变化	異なり語数	形成期の延べ語数	完成期の延べ語数
【会】 → 【会】	0	0	0
【会】 → 【地】	7	20	12
【会】 → 【両方】	7	17	102
【地】 → 【会】	5	6	5
【地】 → 【地】	68	176	193
【地】 → 【両方】	27	74	256
【両方】 → 【会】	3	15	3
【両方】 → 【地】	47	411	228
【両方】 → 【両方】	89	2743	2583
計	253	3462	3382

【地】から【両方】へと、溶け込み度が高くなる場合、完成期に延べ語数が多くなる傾向がみられる。以下はその例である。数字は延べ語数をあらわす。

案外【地】4→【両方】29 一応【地】9→【両方】57

簡単に【地】1→【両方】21 実際に【地】2→【両方】24

[13]「実はですね、このせがれが三月に入学試験を受けましたんですが、本人の不勉強の結果ですね、どこも駄目、ということにですね、一応まあ、なった訳でして……」(三浦朱門『セルロイドの塔』)

[14] その土曜日の午後、下宿にきた節子に、私は佐野の自殺を簡単に伝え、その手紙を手渡した。(柴田翔『されどわれらが日々』)

その半面、【両方】から【地】へと、溶け込み度が低くなる場合は、形成期より完成期に延べ語数が少なくなる傾向がみられる。以下はその例である。

一心に【両方】17→【地】2 至極【両方】16→【地】2

自然と【両方】16→【地】2 大概(は)【両方】20→【地】6

[15] 綺麗な着物が東京の町の復興につれて目立つと、彼女はその美しさに眩惑されて、盗んでも身につけたいと、一心に思い詰めるようになった。(芝木

好子『洲崎パラダイス』

[16] 出版業として、社歴は割りに古く、地味な社風だったが、戦後の出版ブームにつれて、自然と間口がひろがり、社員の数もふえた。(永井龍男『四角な卵』)

そして、【地】から【地】へ、【両方】から【両方】へと、使用場面に変化のないものは延べ語数が一定している。例外は会話に使われるもので、これは必ずしも上に述べた傾向どおりとはいえない。【会】から【地】へと溶け込み度が低くなるものは、延べ語数も少なくなっているが、【会】から【両方】へは逆に延べ語数が多くなっているし、【地】から【会】へ、【両方】から【会】へも同じである。その理由は前述したとおり、形成期と完成期ともに会話文にしか出現しないものが異なり語数、延べ語数ともに少なく、こうした傾向の変化をみるに十分な数値ではないからだと考えられる。形成期と完成期に共通して会話文にしか出現しない用例が一つもないのもそれを裏付ける。

そこで使用場面の変化が出現形態とはどんな関係にあるかをみることにする。表12は、使用場面の変化を出現形態別に分類したものである。

表12 共通漢語副用語の使用場面の変化の出現形態別分類

使用場面の変化	ニ型	φ型	トシテ型	ト型
【会】 → 【会】	0	0	0	0
【会】 → 【地】	4	3	0	0
【会】 → 【両方】	2	4	0	1
【地】 → 【会】	3	2	0	0
【地】 → 【地】	35	16	8	9
【地】 → 【両方】	14	9	0	4
【両方】 → 【地】	22	16	0	4
【両方】 → 【両方】	29	55	0	0

溶け込み度の高い【両方】から【両方】の項目にはニ型よりφ型が多く、溶け込み度の低い【地】から【地】の項目にはニ型がφ型より多い傾向が顕著である。副用語として熟し、溶け込み度の高いほどφ型をとりやすく、溶け込み度の低いほどニ型をとりやすい出現形態上の特徴が使用場面の変化からも確認されるのである。

5. 近代漢語副用語における注釈副詞の増加

以上出現形態と使用場面に注目し形成期と完成期の漢語副用語を比較してきたが、ここでは意味に注目してみる。形成期にあって完成期に使われなくなっているものには以下のような情態副詞類が多く、前述したとおり文語文の色合がだんだんなくなるとともに使われなくなったとみられるトシテ型とト型が多い。

一散に 因果と 嫣然 屈強に 肅々として 静粛に 泰然と 適宜に

[17] お勢は大榎の根方の所で立止まり、翳していた蝙蝠傘をつぼめてズイと一通り四辺を見直し、嫣然一笑しながら昇の顔を窺き込んで、(下略) (『浮雲第二編』)

[18] そして丁度此時ダガルは泰然と構へながら、フォントルロイ殿を熟視して、満足したのか、今度はすさまじい獅子の様な頭を黒天鷲絨の小さな膝の上へ麗々と載ました。(『小公子』)

その他の情態副詞類は語感の新旧等何らかの理由で新しい情態副詞と入れ替わることによって使われなくなったと推定される。形成期から完成期に至るまで増えてきたものでもっとも多いのはもちろん情態副詞類であるが、以上みたように情態副詞類は入れ替わりがはげしい。半面形成期から完成期の間持続的に増えてきたものは以下のような注釈副詞類である。このうち下線を引いてあるのは完成期にあたらしく増えた注釈副詞である。ここでの注釈副詞の定義は渡辺実(1971)で定義されている誘導副詞から陳述副詞を除いたものに相当する。

案外 意外に 一般的に 元来 結局 事実 実は 所詮 当然 土台
普通 (は) 本来 無論 勿論

[19] ここは高距約二〇〇メートルの岩壁で、私たちは普通前穂東壁と呼んでいる。(井上靖『氷壁』)

[20] さて、建て方は6棟とも同じであるが、矩形でない地所に矩形の家が建ったから、当然、庭に大小ができたのである。(山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』)

もちろん、形成期の注釈副詞で「畢竟」「結句」のように完成期には使れなくなるものもあるが、全体的にみて注釈副詞は増えているし、両方に共通する注釈副詞の場合は延べ語数が増え使用頻度も高くなる傾向にある。もともと和語には注釈副詞が少ない。実際、小説の和語副詞のデータに採集された注釈副詞はせいぜい「あいにく」「さいわい」「せめて」「たしか」くらいである。文の内容に対する話者の評価をあらわす和語の表現に、次のような副詞以外の表現が多用されるのも和語の注釈副詞が少ないことを裏付ける。

めずらしく東京に大雪が降った。(形容詞連用形)

たしかに君の考えは正しい。(形容動詞連用形)

困ったことに、さいふをなくしてしまった。(連語)

残念ながら、その名前を忘れました。(連語)

おかげさまで、病気も直りました。(連語) (市川 孝 1976, p. 238)

形成期から完成期の間、数の少ない和語の注釈副詞を補う形で漢語の注釈副詞が増えてきたと考えられるのである。もともと漢語語基はいろんな助辞をともない、いろんな文の成分になりうる性質をもっている。以下の「事実」を例にすると、「事実」という一つの語基は「事実ガ・ヲ」「事実ダ」のような形で文の成分となることが一般の用法であり、 ϕ 型の用法はそれから生まれたものである。

- [21] ベストセラーを全部読むというバカもないだろうが、日本人のいい読者がマス・コミに引きずり回されて、めちゃくちゃにされていることは事実だ。(河盛好蔵「読書問答」『人間読本』)
- [22] 自分の読んでいるのは原文ではなく仏訳だが、その仏訳からもヘスの文章があまりにたんたんとしていることがわかるからだ。たんたんとはこの怖ろしい事実を書いているのである。(遠藤周作「旅の日記から」『遠藤周作文学全集第12巻評論・エッセイI』)
- [23] 事実、アメリカ政府は、ケネディ大統領の発表に先立ち、ライシャワー大使を通じて実験再開をわが政府に正式に通告したといわれる。(朝日新聞社説, 1962. 3. 3)

それに対して和語語基は漢語語基ほど ϕ 型をとって文頭に位置することが自由ではない。近代漢語副用語において、数の少ない和語の注釈副詞を補う形で漢語の注釈副詞が増えてきたのは、和語語基より文のいろんな成分に自由に転成できる漢語語基の性質に起因すると考えられる。

6. まとめ

前稿の近代語形成期における漢語副詞の分析につづいて、本稿では近代語完成期のものを対象とし、漢語副用語と和語副詞との比較と形成期と完成期の漢語副用語の比較を行った。これによって、近代漢語副用語の特徴の一端と近代漢語副用語の出現形態と使用場面との関連性を明らかにすることができたと考える。今後の課題としては、より範囲を広げて副用語としての漢語の機能を詳しく分析し、近代における漢語の特徴を明らかにしたい。

【調査対象作品】

〈小説〉(著者名の順)

井上靖『氷壁』(1957, 新潮社), 遠藤周作『おバカさん』(1959) (『遠藤周作文学全集第5巻長編小説5』, 1999, 新潮社), 獅子文六『自由学校』(1950) (『獅子文六作品集第9巻自由学校・虹の工場』, 1958, 角川書店), 芝木好子『洲崎パラダイス』(1954) (『芝木好子作品集第1巻湯葉・隅田川』, 1975, 読売新聞社), 柴田翔『されどわれらが日々』(1964, 文芸春秋新社), 永井龍男『四角な卵』(1954, 文芸春秋新社), 三浦朱門『セルロイドの塔』(1959) (『筑摩現代文学大系81三浦朱門・三浦哲郎・立原正秋集』, 1978, 筑摩書房), 三島由紀夫『美徳のよろめき』(1957, 大日本雄弁会講談社), 山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』(1963, 文芸春秋新社)

〈シナリオ〉

『年鑑代表シナリオ集60-69』(シナリオ作家協会編, ダブィッド社), 『日本シナリオ大系第4, 5巻』(シナリオ作家協会編纂, マルヨンプロダクションシナリオ文庫) から多数〈新聞〉

『朝日新聞縮刷版』(1962, 65, 68, 朝日新聞社) の1-3月分の朝刊の社説と天声人語の記

事

〈隨筆〉(著者名の順)

井上靖『井上靖エッセイ全集第1巻忘れ得ぬ人々』(1983, 学習研究社), 内田百閒『つはぶきの花』(1961, 筑摩書房), 遠藤周作『遠藤周作文学全集第12巻評論・エッセイⅠ』(2000, 新潮社), 河盛好藏『人間読本』(1966, 番町書房) 幸田文『幸田文全集第15巻』(1996, 岩波書店), 小林秀雄『小林秀雄全集第12巻考へるヒント』(2001, 新潮社), 福原麟太郎『日本の空の下』(1966, 雷鳥社), 森田たま『ぎるん随筆』(1964, 講談社)

【文献】

- 市川 孝 1976 副用語, 『岩波講座日本語6 文法Ⅰ』, 岩波書店
北原保雄 1975 修飾成分の種類, 『国語学』103集
国立国語研究所 1991 『日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法』, 秀英出版
鈴木 泰 1983 漢語ナリ活用形容動詞の史的 성격について, 『副用語の研究』, 渡辺実編, 明治書院
竹内美智子他 1973 「現行辞書における副詞一覧」, 『品詞別日本文法講座5 連体詞・副詞』, 明治書院
橋 豊 1973 連体詞・副詞と他品詞との関係, 『品詞別日本文法講座5 連体詞・副詞』, 明治書院
趙 英姫 2001 近代語形成期における漢語副詞の出現形態と使用場面との関連性, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第46輯第3分冊
中右 実 1980 文副詞の比較, 『日英語比較講座第2巻文法』, 国広哲弥編, 大修館
野村雅昭 1998 現代漢語の品詞性, 『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』, 汲古書院
前田富祺 1983 漢語副用語の種々相, 『副用語の研究』, 渡辺実編, 明治書院
1983 漢語副用語の変遷, 『国語語彙史の研究』4, 国語語彙史研究会編, 和泉書院
水谷静夫 1951 形容動詞辨, 『国語と国文学』28-5
宮地 裕 1973 現代漢語の語基について, 『大阪大学 語文』31
森岡健二 1994 『日本文法体系論』, 明治書院
山田孝雄 1940 『国語の中に於ける漢語の研究』, 宝文館
渡辺 実 1971 『国語構文論』, 塙書房

【辞書類】

- 見坊豪紀他編 2001 『三省堂国語辞典 第五版』, 三省堂